



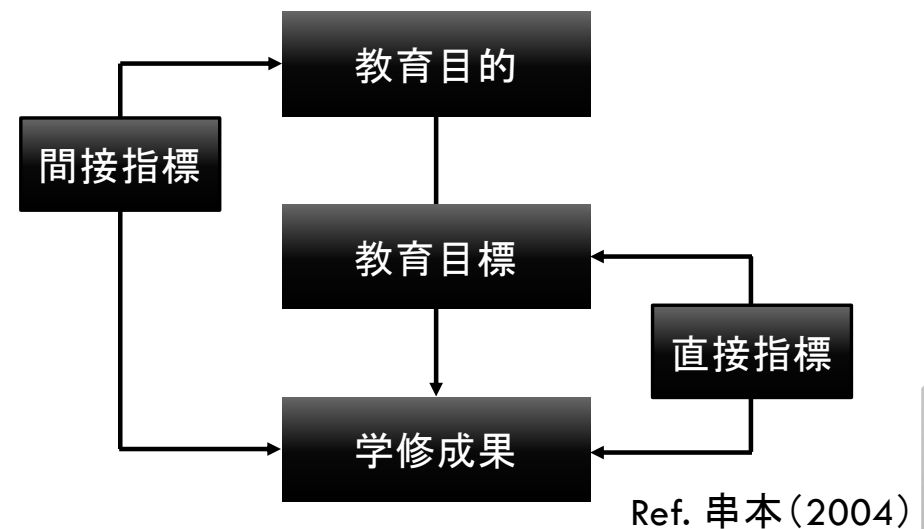
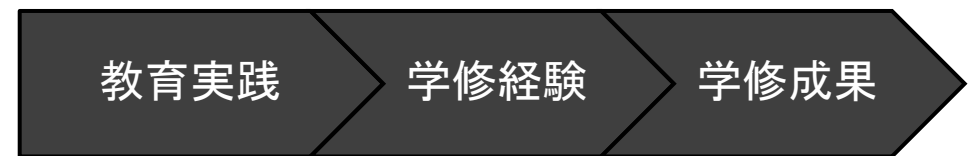
# 教学IRにおける学修成果認識の捉え方 卒業生を含むパネルデータ分析の試み

T. KUSHIMOTO, IEHE/CIR @ TOHOKU UNIVERSITY

JACUE CONFERENCE 2022 @ 岡山理科大学、2022.6.5

# 教学IRと学修成果認識(1/6)

- 学士課程教育に係る意思決定に必要な情報を収集・分析・報告
  - 改革の要否を判断する際、学修成果に関する情報が最も重要
  - 直接指標:教育目標の達成度を示す。例えば、学業成績
  - 間接指標:教育目的の達成度を示す。例えば、学修成果認識
- ⇒二つの指標の相関を見ることで、教育目標の妥当性を評価できる



# 卒業生調査(2/6)

## 日本での展開

1990年代: 広大、京大での試み

2000年代: 認証評価制度の発足

2010年代: 実施率 38.6% (AY2014)  
61.3% (AY2019)

2020年代: パネルデータ化?

⇒ 全国調査(公的機関実施含む)が  
主流の諸外国と対照的

## 長所

卒業後の状況を踏まえた回答  
→ 在学中には聞けない学修成果

教育効果の遅効性を検証  
→ 在学中の回答と比較

## 短所

調査台帳の作成が大変  
低い回答率

## 教育評価分析センターの取組(3/6)

### Learning Outcomes Survey (LOS)

名称: 東北大学の教育と学修成果に関する調査

2012年度から2年に1回実施

調査項目: 教育に対する評価、学修経験、学修成果認識など

### LOS2020

対象: AY2020卒業・修了 計4,621

回答数1,608、有効回答率34.8%

### Tohoku Alumni Survey (TAS)

名称: 東北大学の教育に関する卒業・修了生調査

2017年度から4年に1回実施

調査項目: 学修成果認識、教育の貢献度、現在の状況など

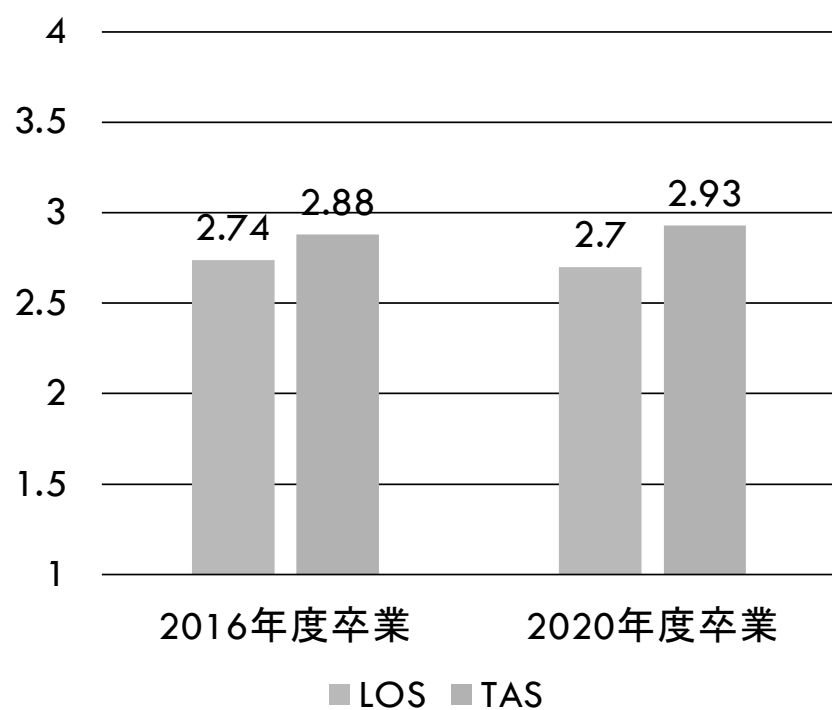
### TAS2021

対象: AY2012,2016,2020 計11,398

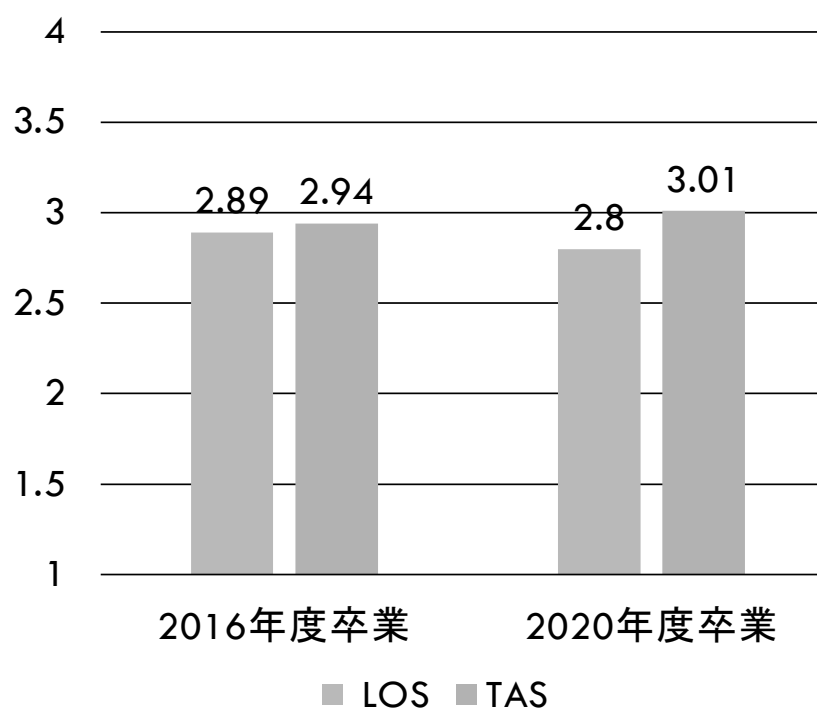
回答数1,532、有効回答率13.5%

# 学修成果認識の平均点(4/6)

## 横断データ



## パネルデータ



# 平均点差分の分析(5/6)

クロス表集計: 平均点上昇%

	2016年度 卒業	2020年度 卒業
卒業学部		
文系	34.3%, n=35	42.9%, n=14
理系	86.7%, n=15	75.8%, n=33
保健系	54.5%, n=11	50.0%, n=14
就業状況		
常勤	49.1%, n=53	54.2%, n=24
その他	62.5%, n= 8	67.6%, n=37
全体	50.8%, N=61	62.3%, N=61

重回帰分析: 平均点差分

	標準化 推定値	t	p
切片		4.741	.000
卒業学部			
文系	-.811	-3.735	.000
保健系	-.549	-2.315	.022
就業状況			
常勤	-.186	-.861	.391
卒業年度	.006	.056	.955

$R^2=.174$ .  $F=6.14$ ,  $p<.001$ .

## まとめと展望(6/6)

- 卒業後の方が平均点が高い点、2020年度卒業生の方が伸びが大きい点は、横断データとパネルデータで共通
- パネルデータがあれば個人レベルにおける変化の検証が可能
- 教学IRで把握すべき学修成果認識は、集団レベルか個人レベルか
- 卒業後に顕現する学修成果を意識した学士課程教育であれば、学業成績と卒業生調査を紐付けたパネルデータ分析が有益か

## 参考文献

- 金子元久・山内乾史・小方直幸、1994、卒業生からみた広島大学の教育：1993年卒業生調査から、広島大学 大学教育研究センター
- 串本剛、2004、教育成果を用いた教養教育の評価活動：NIADによる試行を切り口として、高等教育研究7、137-154
- 串本剛・松河秀哉・杉本和弘、2022、卒業生調査を使った研究の類型と動向：教学IRにおけるパネルデータ分析の基礎的検討、大学評価研究21、未刊行
- 文部科学省、2016、平成26年度の大学における教育内容等の改革状況について
- 文部科学省、2021、令和元年度の大学における教育内容等の改革状況について
- 竹内洋編、1995、卒業生からみた京都大学の教育：教育・職業・文化，広島大学 大学教育研究センター